

〔信長公記<sup>十五</sup>〕天正十年正月朔日、隣國之大名小名、御連枝之御衆、各在安土候て御出仕有<sup>略</sup>○中、今  
度は大名小名によらず、御禮錢百文ヅ、自身持參候へと、堀久太郎、長谷川竹以、兩人御觸也<sup>略</sup>○中、  
御白洲へ罷下候處に、御臺所之口へ祇候へと上意にて、御厩之口に立せられ、十疋宛之御禮錢、忝  
も信長直に御手にとらせられ、御後へ投させられ、他國衆、金銀唐物様々の珍奇を盡し被備上覽、  
生便敷様體不申足、

〔鹽尻<sup>四</sup>〕武家、年始に主君を拜するに、烏目を捧て贄とするは、天正十年正月元日、江州安土の城  
にて、信長儉約の令ありしより始ると云々、

〔官中秘策<sup>十五</sup>〕正月元日卯中刻、百官總登城<sup>略</sup>○中

一 獻上太刀目録、先達而留守居御城へ持參、留守居<sup>半熨斗目</sup>四品以上之留守居、布衣を著も有之、御

坊主衆<sup>江</sup>頼置、主人登城迄、御玄關切石之上、或御白砂筵道之縁ニ相待、主人出仕已後、蘇鐵之間

或者殿上之間之落縁へ伺公、主人拜領之時服、御坊主持出る時、共に御玄關へ罷出、宰領之士<sup>江</sup>

相添、吳服入葛籠長持兼而御玄關へ取寄置、主人退出以後歸宅、

一 在國在邑、或は病氣等の御太刀獻上之使者、士烏帽子<sup>のしめ、素襖袴</sup>、留守居<sup>半素襖袴</sup>、同道、御玄關と殿上之

間の掛縁に衝立屏風立候、其元ニ而御坊主衆帳面ニ付、主人名、使者名、帳面ニ付、其後御玄關疊

之上並居、太刀目録前に置、已後御徒目付衆帳面を以、主人之名被呼候時、居候之由若帳面無之

時、右之御徒目付へ相斷之、再々呼出し、起て御縁廻り順々に行、大廣間於三之間、御老中列座、御

奏者番へ渡之時、折紙を外へ打返し、主人之名見え候様に渡、主人之名を書時少し退、呼主人之

名披露之時稽首して退き、直に落縁に出勤之道を不行、同道之留守居、近年不被差置御禮也、

〔官中秘策<sup>二十三</sup>〕年頭八朔御太刀獻上使者之事

一 到著御年寄<sup>江</sup>、同道御内意伺之、御用番同道御連狀差上候、時刻御差圖有之、殘御老中へ使者同